



12月上旬咲き寒菊の有望品種

切花の菊は仏花として8月～10月の盆や彼岸時期に需要が多く、東京都内においても多くの品種が栽培されています。最近では出荷量を平準化するために、12月上中旬咲きの寒菊の取り組みも始まっています。しかしながら、寒菊については直売所向けの揃いや花形の良い品種が少なく、生産者から都内生産可能な有望品種を明らかにしてほしいという要望が出されていました。そこで、農総研では白色系の6品種と黄色系品種の9品種について切花長や花数などの切花特性を評価しました(図1)。

白色系品種では調査した6品種すべてで、黄色系品種では9品種のうち「キーラ」など6品種が12月上中旬に咲きました。生産者のアンケート調査から、白色系では「寒さきの」、「シェール」、「ほしぞら」が、黄色系品種では「寒たつみ」、「寒にいね」、「金水晶」が、特に花数の多さ、花形の揃いと花と茎葉のバランスに優れる品種として有望でした。白色系品種はすでに直売所で販売しており、なかでも「シェール」(図2)は芯が黄緑色で西洋花のような色合いと花型でアレンジとしても利用できることから、評判も上々でした。今後は直売所で人気の高い、赤色系の寒菊についても検討します。

(園芸技術科 花き研究チーム)



図1 花き生産者による圃場での評価



図2 アレンジにも利用可能な白色系品種「シェール」

学校給食向けコマツナのおすすめ品種の紹介

近年、東京都では地産地消の推進、食育教育の一環として、学校給食用に地場産野菜の需要が高まっています。このような給食向けコマツナとして、大株で出荷する事例が増えています。今回は、令和3年11月16日に開催された第63回野菜・花き種苗改善審査会「秋まき業務用コマツナ（ハウス）の部」の結果から、給食に向けたコマツナ出荷に適する品種を紹介します。

審査会では、草丈30~40cm程度の大株で審査され、収量性、揃い、葉の厚さ、収穫のしやすさなどが評価のポイントになりました。出品20品種のうち、7品種が入賞し、「あっちゃん」



図1 「あっちゃん」(雪印種苗)



図2 「こいしい菜」(カネコ種苗)

（雪印種苗、図1）、「こいしい菜」（カネコ種苗、図2）、「江戸の小町」（日本農林社）、「神楽坂」（日本農林社）、「里ごころ」（武蔵野種苗園）などの品種が高い評価を得ました。これらの品種は秋まきの給食向けコマツナとしておすすめです。（江戸川分場）

表土飛散防止に役立つ冬季の緑肥利用

都内畑地の90%以上を占める黒ボク土は軽く、冬季の季節風により畑の表土が飛散することが問題となっています。緑肥はそのまま田畑にすきこむ作物のことで、土壌の理化学性を改善するために栽培されますが、冬季に緑肥を栽培し土壌表面を覆うことで飛散防止効果も期待できます。そこで農総研では、3種の緑肥（ライムギ、エンバク、ヘアリーベッチ）計9品種を用いて、播種時期や品種の違いによる植被率（植物が地面を覆う比率）と生育量を明らかにしました。10月中旬に播種すると、すべての品種で速やかに土壌表面が覆われましたが、一部の品種は3月に出穂し、雑草化の恐れがあることがわかりました。また11月下旬に播種すると、品種によって生育の違いが顕著に表れ、3月の刈取り時点でも植被率が20%程度の品種も確認されました。試験の結果、10月中に播種できる場合はライムギ「春一番」（雪印種苗）が、11月以降に播種する場合はライムギ「ライ太郎」（タキイ種苗）が、植被率が高く生育量も多かったため有用であることがわかりました（図1）

（生産環境科 土壌肥料研究チーム）



図1 3月時点の生育の様子
左：10月播種「春一番」、右：11月播種「ライ太郎」

地域特産作物に使用できる農薬の安全性と効果の検証

東京都では、アシタバ・軟化ウド・パッションフルーツなどが特定の地域で特産作物として栽培されています。このような地域特産作物には病害虫（図1）の防除に使用できる農薬が少なく、生産現場での課題となっています。そこで農総研では、これら特産作物に使用できる新たな農薬の安全性と効果の検証に取り組んでいます。対象とする農薬を作物に施用し、①農薬が効くか、②薬害は発生するか、③残留する農薬量がどの程度かの3項目を検証し、効果や安全性を評価しています（図2）。とりまとめられた試験成績をもとに、国が効果や安全性を確認し、使用が許可されます。試験開始から許可まで安全性を評価するため少なくとも4～5年がかかります。

（生産環境科 農薬・安全性チーム）



図1 病害虫被害

左：ウド疫病の被害

右：アシタバのハナウドチビクダアブラムシの被害



図2 各種分析機器

左：液体クロマトグラフ、右：ガスクロマトグラフ

100年の森づくりに向けて植栽しました

大規模森林所有者が保持してきたきめ細やかな保育管理などの伝統的な施業技術が、林業の低迷により途絶えようとしています。また、都内の歴史的建造物等の建替えには、樹齢100年生以上の優良大径材が必要ですが、全国的に不足しています。

そこで、失われつつある伝統的な技術・技法を、東京都が見本林で実演及び提示することにより、林業事業者へ継承し、優良大径材の生産を推進するとともに、多摩産材のブランド化を推進していきます。この優良大径材の見本林として農総研日の出試験林に100年の森づくりに向けて、少花粉スギ（図1）、少花粉ヒノキの苗木を各々1ha、6,000本、2022年2月から3月にかけて植栽しました（図2）。

今後、100年の森づくりの施業技術を記録、継承していきます。また、植栽木の生育状況を、ドローン、レーザスキャンなどスマート林業の新しい技術で測定していきます。（緑化森林科 森林研究チーム）



図1 少花粉スギの苗木



図2 100年の森 少花粉スギの植栽地
（撮影：2022年7月）

ブバルディアの東京オリジナル品種の開発

～第2期の3品種の試験栽培をスタート！～

伊豆大島の特産切り花であるブバルディアの生産拡大とブランド化に向け、農総研では、東京都島しょ農林水産総合センターや生産者の協力のもと、東京オリジナル品種の開発に取り組んでいます。これまでに第1期として一重咲きの「東京スター」シリーズ3品種を育成し、大島で生産が広がっています（第52号掲載）。次いで2021年に第2期として、華やかな八重咲きの「東京ダブルスター」シリーズ3品種（図1、第59号掲載）を育成しました。これらの新品種は現在主流の海外品種に匹敵する品質をもち、大島で栽培しやすいことから高い収量も見込まれます。今後の普及に向けて、昨年度から大島で試験栽培がスタートしました（図2）。市場に試験出荷したところ、海外の八重咲き品種と同等の値付けとなりました。また、「サニーレッド」は生育が早く、1年目から収量が多いなど、各品種の栽培特性が明らかとなりました。本試験栽培は今年度も継続し、得られたデータを活用して大島での本格的な普及を目指します。

（園芸技術科 植物バイオテク研究チーム）



図1 第2期3品種のブバルディア「東京ダブルスター」シリーズ
左：「スノーピンク」、中央：「恋桜」、右：「サニーレッド」



図2 大島での栽培試験の様子

農総研が所蔵する細密画から昔の研究を知る ～第6回～

ハクサイは漬物としての需要の多い茎葉菜類で、明治大正期には漬菜（ツケナ）あるいは菘菜（アオナ）と呼ばれていました。また、漬菜の多くは図1に示す結球しない品種「^{まがりかねな}曲金菜」（図1）をはじめ「^{みかわしまな}三河島菜」、^{からひとな}「唐人菜」がほとんどでしたが、次第に結球する結球白菜



図1 「曲金菜」



図2 結球白菜「包頭蓮」

「^{ほうとうれん}包頭蓮」（図2）に変わりました。「包頭蓮」は、大正後期より品種比較の試験の他に純系分離育種が行われ、均一な品種として昭和6（1931）年より原種配布されました。種苗会は原種を基に増殖し、東京の冠を付けた「東京包頭蓮白菜」と称して種苗配布を行いました。

（研究企画室）



細密画アーカイブ
公開中



育てます豊かな食とみどりの東京

公益財団法人 東京都農林水産振興財団 農林総合研究センター

〒190-0013 東京都立川市富士見町3-8-1

HP: <https://www.tokyo-aff.or.jp/site/center/>

TEL: 042-528-5216

Twitter: @tokyo_tdfaff

こちらのQRコード
からご覧ください

